

---

# とある転生の原子操作（メルトオペレーション）

飯屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある転生の原子操作<sup>マルチオペレーション</sup>

### 【Nコード】

N2863Z

### 【作者名】

飯屋

### 【あらすじ】

運命的な流れか、死とともに少年は『とある』世界に出現した。何故そこにいるのか、何故そうなったかはわからない状況でも少年は気楽に考える。そこで、予想外の『同類』と出会うとは思わずに……。そして、彼もまた物語に巻き込まれていく。転生&原作介入あります。主人公は強くなる？ 予定です。ヒロインは……。どうしましょw皆さんの感想で決めましょうかねw

## 第一話：Dead and Alive（前書き）

初めまして！

ヒロイン不安定に定評のある飯屋と申します。

このたび、以前から挑戦してみたかった転生ものというのに挑戦してみました。

とはいっても作者の妄想がモトとなっておりますので突っ込みどころが多いかもしれませんが、転生ものOKという方、ぜひ読んでいただけたらと思っております！！

感想は参考にもしたいので出来たらくだ（ry

少し長いかもしれませんが、なにとぞよろしくお願いします。

そこまでシリアスにする気は・・・ある？かも。

気楽に読んでいただければいいかなあと思います。

さあて、ヒロインは誰にしましょうかな。

## 第一話：Dead and Alive

ある日、少年は怪死した。

少年は病気を持っていたわけでもなく、急に発病したわけでもなく、また大きな怪我一つしていない。

にも関わらず、少年は糸の切れた人形のようにその場に崩れこんだ。それもまるで心臓の部分だけ幽霊であつたかのように、消滅して、だ。

だが、それは世界には無関係な出来事で今日も明日も明後日も明々後日も、時は続いていく。

齒車は回る。

あらゆる命をめぐり合わせ、運命を廻らせていく。

そして、死んだその少年の運命もまた……………。

この世界の科学、の総本山にして超能力者すらも開発できる学生の街、学園都市。

230万人の人口の大半が学生だが、手入れが行き届いていたり風車も多かったりクリーンな街である。

都市、と言うよりは国に近いこの学園都市のその四割方が能力者、つまりは超能力を使える人物だ。

さらにその中の第七学区という中等教育機関を主にしていて、多くの学生や教師がすんでいる学区。

その中のさらに中の路地裏を、一人の少年が歩いている。

「・・・（うーん・・・晩御飯、何にしようかな・・・）」

まるで上から染めたような真っ黒な髪に、整った顔立ち。

夏用の制服、つまりはカットソーシャツを着ていて、腕には青色のリストバンドが巻かれていた。

そして彼は、スーパーなどで入れてもらえるポリエステル製の袋（中から大根や葱が顔を出している）を右手に持っていた。

（・・・転生して最初に買い物・・・気楽なのかな・・・）

少年はカットソーシャツ以外の姿ならマフラー必ず着用している変わ

り者であるが、性格が荒々しいなどということはない。

一見すると何も無い学生に見えなくもないのだが、実の所はとんでもない事情でここにいる。

ここに、という言葉は世界を示している。

そう、少年は本日転生を果たし、この世界に現出した存在なのだ。

（書庫バンクにもすでに俺の名前があった・・・ある程度なら銀行に俺の金もあつた・・・。何か、まだしっくりこないな）

少年の名は、てんのうじひびき天王寺響。

彼は俗に言われる前世という世界で、怪死している。

理由はよくわからないが、運命的、つまりは定めのようなものだったと『何か』に教えられた。

『何か』という曖昧な表現をするのは、転生した際にあつた記憶に転生について誰かに教えられた記憶があつたからだ。

しかし、『何か』が誰か、まではわからない。

転生させられたのも、運命・・・らしい。

神様が教えてくれたのかな、と気楽に響は思いつつ、路地裏から表の道路に出る。

暗いところから急に明るい場所に出たせいか、サンサンと降り注ぐ強い光が、響の目にしみる。

まず、彼は転生に気付くまで（というよりはそんな非・現実な出来事を認めるまで）かなり時間がかかった。

清掃ロボや超能力を見て、ようやく認めるに至ったわけだが、まだ受け止めきれていない様子だ。

どうすれば、どこに行けば、どこに住めばいいかわからないまま道に迷ったせいで（キヨロキヨロと怪しげだったから）警備員に少し調べられた。

そのときに、幸いにも苦労せずに書庫に自分の名前と入居する予定の寮、学校を確認できた。

そこには転校生扱いとなっていて、明日から柵川中学校（三年生）に転校することになっていた。

（警備員の話から察するに連続虚空爆破事件が目立ち始めたところ・・・）

能力もまだ判明していない響にとって原作介入するかどうかは重大な問題だった。

(レベル低いと死ぬ・・・かもな)

自分という存在がいるだけでも、原作という本来のレールからは多  
少ずれる。

つまり、この世界に響が来た時点から多少の変化を帯びた平行世界  
になっているであろうということだ。

(・・・はあ、どうしたもんか・・・)

割と広い歩道を歩きながら、周囲の様子を確認する。

ドラム缶のような形状をした清掃路口ボが行きかっていたり、風車  
があったり、

道の隅では柄の悪い男がいたり、などと見るだけでも響にとって新  
鮮な空間であることが感じられる。

新しい生活が始まるんだな、とどうしても考えてしまう。

(えーっと・・・確か俺の寮は・・・柵川中学の近くだよな?)

学生寮に入るのは初めてで、やはりどこか緊張している自分がある  
ことに気付く。

響自身、料理は得意であるため食べることには心配はない様子だ。

(・・・あ、・・・・・・・・・・・・・・・・・・)



そこでふと響は重大なことに気付く。

(・・・部屋の鍵がなかった・・・)

どうやって寮に入る気だったのだ？

自問自答しても答えは返ってこない。

とりあえず、鍵を取りに行くことにする。

転校してきたということになっているからには、学生寮も学校が関係してくる・・・はずだ。

(生徒たくさんいるだろうけど、先生に挨拶もしなきゃな)

道がわからないため、ポケットから薄い端末を取り出す。

最新式の向こうの世界で流行っていた薄型の携帯端末を左手で操作し、地図を表示する。

柵川中学校と入力し、場所を確認する。

端末の見た目は前居た世界と大差ないが、中身の性能は比べるまでもなかった。

地図も当然高性能で、今まで見づらかったものを使っていた響には十分すぎるくらいわかりやすかった。

まだ学校があるためか、あたりの学生は思ったよりも少ない。

きっちり整備された道を歩きながら、響は夏の暑さを体感する。

暑さは変わらないらしく、非常に飲み物が欲しくなる。

一応スーパーの袋にはドライアイスを布に包んで入れていたので食材はおそらく大丈夫だろう。

学校がある、といっても今日は土曜日であるため午前中授業だけのところが多いだろう。

ただいまの時刻は12時過ぎ。

早めの学校ならもう学校は終わっているだろう。

道の途中で、人が集まっている場所を響は見つけた。

（ん・・・？）

何か店でもあるのかと期待してそちらに視線を移したが、違った。

人が集まっているというのは間違っでは居ないが、その人たちは響から見て個性的だった。

学園都市名物の不良、というやつである。

基本、ここは何か悪いことでもおきているのではないかと警戒するものだが響には個性的な人物、にしか見えていないらしい。

転生する前の世界では、ああいう人物は普通に暮らしているとあまり見かけないからというのもあるのだが、暑さにやられている響の

脳内ではすぐには理解できなかったようだ。

少し近寄った響の目に、男たちに囲まれている少女の姿が映った。

（女の子？・・・！・・・絡まれてるのか）

その少女には見覚えがあった。ふんわりとしたライトブラウンでセミショート<sup>ミシヨートの髪に、</sup>常盤台の制服。

<sup>わんないきぬほ</sup>  
湾内絹保。

白井黒子の級友で、水泳部員だった少女だ。

レベル3の水流操作系だったことも響は思い出す。

常盤台中学の授業が早めに終わったから、外に出て絡まれた・・・といったあたりだろう。

彼女の性格なら、能力で攻撃して迎撃しないことも納得できる。

主要ではないにしろ原作のキャラの一人をここで見ることになると思わなかった。

（・・・・・・・・）

ちなみに、響は喧嘩が強いわけではない。

しかもまだ能力が無い今、響はただの一般人に過ぎない。

（助けるか）

決断するのに、一秒もいらなかった。

普通に歩いて不良の集まりに近寄るだけでなく、湾内の正面、つまりは集まりの真ん中に躍り出る。

「大丈夫か？」

不良たちがすごい形相でにらんでくるが、響は動かなかった。

元々、響はこういう人間で、怖くともつらくとも、決めたことはやりとおす。

さらにいうならば、お人よしと呼ばれるものにもあてはまり、友達を作ること苦勞したことがないタイプだ。

そんな人間だからこそ、喧嘩に慣れていない。

少し涙ぐんでいる湾内は、驚いた様子で響を見る。

「え？あ、貴方様は？一体・・・！？」

「俺か？俺の名前はて」

天王寺響だ、と言おうとした時、不意に不良の一人が突っかかるようにして集団からこちらへ踏み出してきた。

「何だ？てめえ？いきなり現れたと思ったたら随分調子乗った真似す

んじゃねえか。なあ」

不良の中では結構普通な姿をした男だった。

髪を染めているわけでもなければ、チャラチャラしたものもあまりつけていない。

ただ、ガタイは周囲の不良よりはよく、強面だ。

声も低く、ドスのきいたものだった。

「俺は怒られるようなことはしてないと思うんだが」

響は湾内を守るように立つと、その男と正面からにらみ合う。

改めて男の迫力がこちらに伝わってきた。

周囲は囲まれているため、逃げることはままならない。

「・・・アンタ普通にしてたら、多分周囲のやつよりはモテるぞ？」

「冷静だね。相当な能力者だから？」

「いや、能力はない（怖い・・・コイツ何？ 駒場はもっと怖いのか？・・・）」

「まあいいや。度胸だけは褒めといてやるから、さっさと帰れ、ガキ」

「その俺より年下に絡むお前らはロリコンだな」

「調子のんなよ！おい！」

男は声を荒げた瞬間、地面を蹴って突進するように響に殴りかかってきた。

喧嘩に慣れているのか、重そうな拳を響の顔面目掛けて振るう。

腕の太さからして、響がまともに相手に出来るとは思えない。

いやな予感がした響は首を思いっきり右に曲げる。

その真横を、拳が通り過ぎた。

「うおッ！？」

拳が通り過ぎた際の風圧が頬をなでる。

響が素早く重い一撃をかわせたのは偶然で、彼は心の中で安堵の息をもらしながらもすぐに後ろにいる湾内の手を掴んだ。

振り向かず声だけで合図を送る。

「逃げるぞ！」

「は、はい！」

真横に居た不良の一人の顔に響はもう片方の手に持っていた買い物

袋を投げつけ、その隙に集団の輪から抜け出す。

買い物袋には大根やジャガイモも入っていたので、結構な重さがあったと思われる。

とっさにしてはよく動けた、と自己評価しながらも湾内を連れて走る。

後から追いかけてきている集団を見ながら、逃げている響は徐々に追いつかれつつある状況に焦りながらも路地裏に入る。

薄暗く、埃が多い道を二人は駆け抜ける。

彼の頭の中にあつたこの後のシュミレーションとしては、このまま曲がり角などを利用して逃げ切る、といったものだったが彼は忘れていた。

転生者である自分が、地理的な面において圧倒的なまでに不利だということ。

それこそ、先ほどのように端末で調べればいいのだが、その余裕もない。

「まだ走れるか!？」

「は、はい!」

湾内は水泳部だけあって、普通のお嬢様よりも体力があるらしい。

何度か角を曲がったが、あまり苦にせず走っている。

「ッ！」

ある角を曲がったところで、二人の足が急に止まった。

そこには、大きく、日をさえぎる様に壁があつた。

それはビルの裏側にあたるらしく、塀のように乗り越えることも出来ない。

「行き止まり！？」

「そんな・・・」

他に道がないか探そうとした時だった。

「へッ、残念でしたあ・・・」

「手間かけさせやがって、サンドバックぐらいにはなってくれるよなあ？」

二人は追ってきた不良の集団に取り囲まれた。

「ッ・・・（不味い・・・）」

ジリジリと近寄ってくる集団を前に、響は湾内を自分の後ろに立たせ、警戒する。

先ほどのようなアクションはもう出来ない。



転生早々かよ、と響は呆れたようにため息をつく。

どうしようかな、と次の行動を考えてたその時、響から見て奥、不良たちの集団の後方にいた不良の一人が力なく崩れた。

「おい!？」

「!!!？」

急なことに驚きを隠せない一人が、音もなく地面にひっくりかえった。

不良たちの意識が、後方に向けられる。

(・・・アレって・・・もしかして)

響は、原作知識があるため、この現象を知っている。

「・・・お怪我はありませんでしたの!？」

「・・・あ、ああ・・・」

ザワザワとあたりを警戒する不良の前、つまりは響と湾内の前にツインテールの少女が現れる。

響も、原作人物が目の前に現れたことに驚愕していた。

白井黒子。

学園都市に数少ない空間移動能力者の一人の上、自称御坂美琴の露

払にして治安維持機関風紀委員に所属している変態大能力者の少女。レベル4

何も無かった空間に突然現れ、それを普通としている少女に、数秒送れて不良が気付く。

そんな不良たちに向き直り、白井は腕に巻かれた緑色を主とした風ジ紀委員の腕章を見せ付ける。

「風紀委員、ですの！」ジャッジメント

「助かった、サンキューな（・・・予想以上に・・・強っ）」

風紀委員第一七七支部まで（事情聴取のために）移動した響は白井ジャッジメントを前に笑顔で礼を告げる。

風紀委員第一七七支部の中身は、学生が居座るような空間というよりは、病院や会社といった事務室的なつくりで、そんな部屋には山のように資料が置かれている。

また、今でも情報が届いてきているのか、誰も使っていないパソコンもずっと作動中だった。

慣れるまでは息がつまりそう、と響は感じた。

味気ない机や、椅子が多い中、テーブルを挟んで響と白井はソファに座って向かい合わせになっている。

「申し送れましたが、わたくしは白井黒子と申しますの。  
天王寺さん・・・でしたっけ？・・・貴方のおかげで、湾内さん  
が無事でしたの。感謝いたしますわ」

「いや、俺は何もしてないさ。結局、怖い目にあわしちまった」

「いえ、彼女も感謝していましたわよ？友人としてお礼でもしたい  
のですが・・・」

「そう言ってもらえると助かる。俺、ここにきたばかりだからさ。  
自分で言いたかねえけどまだ右も左もわからないんだ」

「転校生ですの？こんな時期に・・・どこの学校へ？」

「柵川中学校だ」

響の言葉に、同じ部屋でずっとパソコンに向かい合っていた少女は  
何かに気がついた様子で椅子から立ち上がり、二人のいるほうへ歩  
いてきた。

頭に花飾りがあり、まだ顔に幼さを残したかわいらしい少女は二人  
の近くまでくると二人の話に乗る形で入ってくる。

「私も同じ柵川中学です。あっ！わ、私は初春飾利ジャッジメントつていいいます。  
白井さんと同じ、風紀委員です！」

（！）

初春飾利。

ある意味、これほど他と見間違える人物はいないかもしれないくらい、頭の上に乗っけている花飾りは目立っていて、頭の花飾りは何故だか無性にむしりとりたくなるものだった。

造花であるらしいのだが、よく出来ていることは頷けた。

「俺は天王寺響、白井も天王寺じゃ長いだろうから響でいい」

「そうですか？では響さんと呼ばせてもらいますね？そう言えば、どこから転校してきたんですか？」

「（世界の）外からだ」

「なるほど（学園都市の外から、とは）また珍しいですね。大丈夫ですよ！私たちが出来る限り力になりますから！困った時はいつでも頼ってください！！」

初春はあまり厚みのない胸を張り、えへん、と自身満々で言い切る初春。

「そこまでは頼れませんの」

「し、白井さん！！何言ってるんですか！私だって問題の一つや二つ！パパッと解決しちゃいますよ！っていうかしてみせますよ！」

二人のやり取りについて口元が緩む。

二人はそのまま激しい？討論にまで発展し、響を置いてけぼりにしていた。

暇になった響は、ソファにもたれかかるように後に倒れようとする。

その時、不意に声をかけられる。

「随分と女に囲まれているわね」

「!？」

少し大人びてしっかりとした口調に、響は驚いた。

ビクッ、と肩を震わせて前のめりの姿勢になり、目の前のテーブルに額をぶつける。

その衝撃で少しテーブルがゆれ、テーブルの上においてあったコップが倒れかけたが気にしない。

だが、響に声をかけた人物は響の横に出ると改めて口を開く。

「お久しぶり、とでも言うべきかしら？響」

声の主は、茶色く、クセ毛のない綺麗なロングに幼さと大人びた二つの感じを漂わせる顔立ちでどこことなく優雅さを感じさせる雰囲気少女だった。

・・・ 誰だ ？

(いや、違う・・・俺はコイツを知っている)

響の脳が、この少女について考えようとした瞬間から痛みを發した。

とくに騒ぐほどでもないが、脳内の血液が重くなった気もした。

(何だ？頭の奥にフィルターが出来た感じ・・・・・・)  
・・・)

「・・・やっぱりこうなつたわね。・・・お前に残念な脳に簡単に説明するなら『私たちのような存在』は前いた場所の人間に忘れ去られるもののな。理屈云々は私もわからないけど、何故だか私はそういう説明が頭にすり込まれてる・・・。じゃあ今度は私に関してのヒントよ。・・・貴方の身近で、二年前に怪死した人間の名前は？今の、こっちにきた貴方なら思い出せるはずよ」

「『私たちのような』？・・・存在？怪死？・・・お前、まさか『zmdg者』！？ツ！！？(言葉にノイズが！?)」

「いいから考えてなさい」

少女の言葉に、困惑しながらも必死に記憶を辿る響。

怪死？二年前？

(・・・ッ！・・・外傷もないし病気でもないのに死んだやつを、知ってる？・・・まさかッ)

ピキンッ！と頭の中で何かが砕けたような気がした。

それを境に、その人物に関しての、少女に関しての記憶が文字通り響の頭になだれ込む。

痛みは治まったがあまりにも情報が多く脳に負荷がかかったためか、目眩がした。

「……橘藍」  
たちはな あい

そう、前世で、転生前の世界での幼馴染の少女の名を響はようやく思い出せた。

二年前、糸の切れた人形のように倒れ、医者や家族の前で文字通り脳が跡形もなく消滅して死んだとされる少女でプライドが高かったのは変わっていないが、性格は響の知っているものとは違った。

名前を呼ばれた藍はニヤリと怪しげな笑みを浮かべると、響のそばにより、ソファに腰を下ろす。

「ご名答。お前にはよく考えたわ」

「性格は変わりすぎだろ！？何だその女王様キャラ……というより魔王キャラ」

ジャッジメント  
「風紀委員よ……そっちは何？ここにきて早々女の子に絡んで……。一級フラグ建築士にもなるつもり？」

「なんでさ。こっちは最初から不幸な目にあっただけだったのに……」

「・」

「……最初の一言が一級フラグ建築士ね（上条さんとは違う人だけど……）……はぁ……」

「？」

呆れる藍を見て、首を傾げる響。

そこに論争に負け、精神がボロボロになった状態の初春がやっている。

「響さぁ～ん……白井さんひどいですよぉ～……」

「っていうか響さんって橘先輩と知り合いだったんですね！何話してたか知りませんが、仲よさげでしたし」

「切り替わり早ッ！」

初春は『とりあえず、ちょっと資料まとめてきますね』などと言いながらパソコンのほうに向かった。

横にいた藍も、その言葉につられた様にソファから立ち上がり別の机に座り、パソコンと向き合う。

白井は何故かいない。

一人することもなく待たされることになった響は、両腕を頭の後ろで組んでソファに寝転ぶ。

簡易な見た目に反して、全体的にフカフカだった。



（ん？そもそも、俺、何しようとしたんだ・・・？）

いまさらながらクーラーのきいているこの部屋で静かに考える。

確か、湾内を助けようとして……。

・  
・  
・  
その前は。

- 
- 
- 
- 
- 
- 
- 
- 

あ

しばらく続く沈黙の間、ブーツとしていた響はあることを思い出す。

（……寮に向かってたんだっ！っというか鍵！）

「私がついてきてやったことを光栄に思えて？」

「ローラ」スチュワートみたいな口調になってやがる……。まあ、同じような境遇がいるのは助かるけど……」

「よろしい。お前は素直でよくてよ」

うれしくないなあ、と呟きつつ響は歩きながら疲れたように頭に手をやった。

ここは柵川中学の廊下で、響と藍の二人は職員室に向かって足を進

めていた。

流石学園都市といたいくらい、前世の学校よりは綺麗な、というよりも清楚なものだった。

藍の制服と態度と話から、というより説明をつけてのものが藍もこの学校の生徒らしい。

この学校も先ほど授業を終えたようで

響の横にいる彼女が廊下で歩いていくたびにすれ違った生徒はこちらに注目していた。

性格上、目立つても仕方ないと響は思ってしまう。

(・・・それにしても、コイツが風紀委員ジャッジメントか・・・)

・・・ものすごく不安だ。

「今余計なことを考えたわね？」

「いや、違います。ってそれよりもさーっ聞いてもいいか？」

「素直なので許可するわ」

ここで、響は最初に考えていた悩みの元を尋ねることにする。

学園都市に彼女が先に来ていて、しかも風紀委員ジャッジメントにまでなっていたということはあらかじめ何かを持っていることぐらいは簡単に想像が出来たからだ。

「お前の能力って何？」

「そうね。言ってなかった？大能力者の発火能力<sup>レベル4</sup>よ。実質超能力者<sup>レベル5</sup>ぐらいの力は持っているのだけど、脳ある鷹は爪隠す・・・コネで隠させて貰ったわ」

怪しげな笑みのまま得意げにそう言い放つ藍。

いちいち発言のたびに怪しげなことを言う藍に響は疲れたようにため息をつく。

「お前に炎、か。逆らったら跡形もなくなりそうだ。っていうか似合わない似合わない」

「ほう、私は『紅蓮の女王』というイメージ的にぴったり思っているわ」

「その某少年雑誌の漫画ネタ、何人に通じるんだ・・・。それでもイメージとは合わないぞ」

「まあ、フレデリカよりは私のほうがふくらみがあつてよ」

「腹に、か？」

「胸に、よ」

言葉とともに藍の拳が響の顔面に横から入る。

ゴン、と軽い仕草ながらも痛い一撃だった。

「ぶふおッ！？暴力はないだろ」

「気のせいよ」

さらりと否定してスタスタと先に進む藍。

絶対風紀委員ジャッジメントに向いていないだろコイツ、と心の中で突っ込みながら響もそれを追いかける。

疲れた様子でも響はこれから通う学校を見渡しながら進む。

慣れる為に校舎内を周ってから職員室に向かおうという、何とも藍の優しい（藍曰く）優しい提案だった。

こうしてしばらく校舎内を見て回った響は、職員室の前で立ち止まった。

基本的に生徒が入ることを少し意識してしまう教師の聖域の扉を、藍は自ら家のような気軽さで開いた。

そして振り返りつつ、響に指で職員室の中を指差しながら言う。

「とりあえず、先生に挨拶ぐらいはすませてきなさい。私は先に帰るわ」

「……………そうさせていただきます」

この後、無事に鍵を手に入れた少年は不良に絡まれたり、落ちていたバナナの皮をふんで階段から転げ落ちたり、買った肉まんの中に

具が入っていなかったりなどこの世界からの様々な祝福を受けて、  
寮にたどりつくことになる。

## 第一話：Dead and Alive（後書き）

バーロー！主人公気楽過ぎるだろwwとまあこれは自分の感想です。

## 第二話：Get ability level？（前書き）

うーん、オリ主よりもオリキャラ橘藍のほうが目立ってる感じがしなくもないですが・・・。

まあ、いいよね（笑）

個性が出てるってことでよろしくお願いします。

後書きで主人公の能力説明があります。

・・・主人公とか橘藍の説明・・・いりますかね？w

## 第二話：Get ability level？

ある少年が学生寮にようやくたどり着いた次の日の朝。

食材や衣服以外の私物はなく、ベッドにタンスや棚そして机ほどこしか家具がなく、タンスの中や棚もすっからかんで生活感にかけている部屋の中。

最初から設置されていたクーラーによりキンキンに冷えたその部屋の中で、今日から新しい学園生活を過ごす少年、天王寺響は目を覚ました。

基本的に朝が得意ではない上に転生したり不良に絡まれたりして昨日色々あった彼は、ベッドの上で身を起こしたまま数分間ボーっとしていた。

前世で女子にも指摘されたことがある特徴的なまでの真っ黒な髪は相変わらず乱れてすらいらない。

（・・・頭が、痛い・・・）

頭を抑え、しばらく微動だにしなかった響は、枕元にある携帯端末に手を伸ばした。

薄くタッチ機能がついた携帯端末の画面に表示された時刻は、本来登校するにあたって起きなければならぬ時刻をとくに越していた。

まだ脳が十分に動いていない響は、数秒間それを見つめながらじっとしていた。



だが、流石に脳が動き始めた数秒後、電撃にうたれたように彼は目を見開いて驚いた。

（やばッ！！！？転校生が遅刻とかありえないだろ！！）

彼は転がるような勢いでベッドから降り、その勢いで服を制服に着替え、机にあった青いリストバンドを右手首につける。

そのままビューン！とでも効果音がつけられるぐらいのスピードで台所を駆け巡り、朝食のしたく、洗い忘れてたものの片付け、を済まし、そのまま居間へ。

そこで猛スピードで朝食をとり、食器を片付けるとベッドに立てかけてあった鞆を持つとそのまま玄関へ、外へとかけていく。

衣服等の着替え、歯磨きを（手抜きなしで）一分。

その他におよそ七分かけて彼は家を後にした。

（いける！間に合う間に合う！！）

危機に瀕した際の人間の底力に感動しながら、響は寮から離れ、鞆にこっそり（ではない）入れてきた学園都市製の折りたたみ式スケートボードに乗り、さらなるスピードで通学路を駆け抜ける。

某名探偵のようなターボエンジン付きではないにしろ、学園都市の道路の整備は行き届いており滑りやすいだけでなく、学園都市製ということである程度の速度は出せた。

昨日何故か店で目にとまったものを購入していて助かった、と彼は思う。

（ふう・・・ここでこの世界のあの学生なら、不幸なことに見舞われて遅刻するんだろうけど俺は生憎不幸体質じゃあないからな）

ジャッジメント アンチスキル  
風紀委員や警備員に見つかれば即効反省文だろうが、今はおかまいなしだった。

近道とばかりに階段を真ん中に設置されている手すりに乗ることで、器用に滑り降りる。

そして器用にスケートボードの後方を振るようにして勢いを殺さずに、曲がり角を曲がった瞬間だった。

（なッ）

視界にツンツン頭の少年がドアップで映る。

叫びたいところだが、響は驚いて声が出なかった。

（おいおい）

響が見間違えるはずがない。前世、原作を読んでいる中で見慣れたあの人物を。

しかしこのスピードもこの状況もどうにも出来ない響はそのまま、突っ込む。

「ん？」

黒髪ツンツン頭の少年も、こちらに気がついたように振り返ったが、もう遅い。

とつさに動こうと出来たのは驚嘆に値するもののだが、それも無意味に終わる。

「わあああああああああああああああああああああ  
！！！！？」

悲鳴にも雄たけびにもとれる奇声を発しながら、黒髪ツンツン頭と真つ黒髪普通頭が衝突した。

ゴッ！とすさまじい音が鳴り、スケートボードと一緒に響の体が宙を舞う。

一秒ほど宙を舞った彼は幸い背中から地面に落ちたために、大怪我はしなかったわけだが激突した際の激痛に襲われ頭を抑えてうずくまる。

対してそれとぶつかったツンツン頭の少年は地面に転がり、声をあげることも出来ない激痛に襲われてもがいていた。

当然、数分間は二人ともその場で激痛と闘っていたわけなのだが・・

「ちッ、遅刻……してたまるか！」

ツンツン頭の少年と響は同時に起き上がり、お互いぶつかった相手に気がついた。

二人とも激痛と闘っていたためか、ぶつかった事実はもう遠い過去のように思っており、ぶつかったことを思い出すのに数秒かった。

「ッ！ごめんなさい！俺の注意不足です！！」

高速で頭を下げて、目の前の少年に謝罪する響に、目の前の少年は頭をかきながら言う。

「事故なんだから、謝らないでくれって。ええ、ツと・・・俺なら大丈夫だから。この程度、不幸でも何でもないし」

「ごめん。俺、ここにきたばかりでテンパッてて・・・って不幸？」

何故そんなことを言うかわかっていながら、響は不幸という言葉に首をかしげた。

初対面らしく振舞うためでもある。

「いや、大丈夫だって。まあつまり上条さんはこの程度のことではもはや動じないんですよ。ってここに来たばかりなのか？」

「まあ、昨日この街に来たばかりだから、何もわからないんだ」

「珍しいな。ま、困ったことがあったら俺に言ってくれよ。俺にも何か手伝えるかもしれない・・・って自己紹介まだだったな。俺は上条当麻だ。よろしくな」

「（人が良すぎる・・・）俺は天王寺響。こちらこそよろしくな」

「携帯持つてるか？番号とか伝えとくから、何かあったら相談してくれよ」

そう言いつつ、上条はポケットから携帯電話を取り出し、番号などの情報を送信する準備をする。

想像以上の上条のお人好し度に驚愕しながらも、響も薄型の端末を取り出し、連絡先を互いに交換する。

響のこの世界に来てからの電話相手のリストに、四人目（その他：橘藍、白井黒子、初春飾利）の名前が記入された。

転生前の友達のアドレス等は一応とってあるが、それはあくまで思い出ようではない。

（・・・しかし、なんて個性の強いやつばかりなんだ・・・）

機能の電話帳を開き、こちらで登録したメンバーを確認しながら響は心の中で呟く。

「ありがとな、助かる」

「いいいいって俺も世話になるかもしれないしさ・・・って・・・」

「「あ」」

だが、上条と響は二人は携帯に表示された時間を見てあることに気がついた。

二人は再び顔を合わせ、お互い理由を即座に把握。

「やべ、遅刻する!!」

そして二人は慌てた様子でそれぞれの学校に向かい、走り出した。

もちろん、響はスケートボードを拾い上げてから、である。

「元気そうで何よりです・・・あ、あははは」

「ぜえッぜえッぜえッぜえ・・・す、いませ、ん」

「え、いや遅刻してないわよ!？」

「よ、よかった・・・」

柵川中学校の廊下で、響は教師を前に膝から崩れ落ちた。

実はあれからというものの、響は全力で走り抜けてここまでたどり着いたのだ。

最後には校門を通らずに壁をよじ登るなど無茶はしたが何とか遅刻は免れたらしく、安心のあまり全身から力が抜けたようだ。

そんな響を前にオロオロしている黒髪ショートヘアーの女教師は、響が転入するクラスの担任である。

「で、では先に教室に入りますので、呼ばれたら入ってきてくださ  
いね?」

「わかり、ました」

ガラッと教室の扉を開き、中に入っていく教師の背を響は見送った。

（身だしなみくらいは今のうちに整えとかないな）

ゆっくりと体を起こし、制服の乱れを確認、なおすと暫く教室のドアの前で立ち尽くしていた。

（挨拶はありきたりでいいよな）

そして、教室の内から歓声とともに教師の声が聞こえた。

「では転校生、入場だーい」

響は声とともに教室のドアをゆっくりと開けた。

同時に、教室内の視線が響に集中する。

（うー・・・緊張するー）

やや緊張した様子で教壇に乗り、教卓の真横で立ち止まり、教室の生徒のほうに向き直る。

いつの時代も、どこの世界も転校生は非日常的な存在の象徴で、生徒たちからすれば立派なイベントなのだ。

転入してきた側からすれば、迷惑な話なのだが・・・。

「これからこのクラスですごくことになる天王寺響……です。趣味は……えっと」

「天王寺響　基本リストバンドやマフラーを着用している変人、趣味は料理の研究に剣道。特徴は上から染めてそうな真つ黒クロスケな髪に大がつくほどお人好し……ってところかしら？」

「……………は？」

一瞬横から飛んできた説明に、響だけでなくクラスが静まり返った。

だが、ただ驚いているだけの響とは違い、クラスメイト達は全員その説明をした人物に尊敬のまなざしを向けている。

そんなまなざしを向けられている人物を見て、響は妙に納得気味で意気消沈した。

（……………藍……………不幸だ……………）  
・ああ、俺は上条さんじゃないけど……………不幸だ……………）

得意げな顔で大人な雰囲気を出している橘藍は、響と目があつた一瞬だけ怪しげに微笑むと視線を逸らした。

（予想通り、というか予感どおりというか……………）

どうやら彼女はこのクラスにおける頂点みたいなものだろう。

クラスの中から『流石橘様、完璧な情報網だぜ？』とか『戸惑って



る転校生に救いの手を差し伸べるなんて優し〜』みたいなものが聞こえてくる。

どうやら、完全にカリスマスキルを発揮していたようだ。

（ああ、こういう奴だったなあ・・・）

新しい生活に期待していた節があつたが、それも一瞬にして自分と同じ境遇のものによって打ち砕かれ、ガラガラと崩れていくのを響は感じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「はい 天王寺君は橘さんの後の席が空いてるから、そこに座ってくださいね〜・・・・つとその前に身体検査システムスキャン受けてきてくださ〜い。まず保健室は・・・わかりますよね？」

「わかります・・・・畜生。ふ、不幸だ・・・」

教師の指示通り、とりあえず能力を測定しにつかれきつた顔で教室を後にする響だった。

色々な装置を行き来して脳を開発された響は、頭にかつてないほどの違和感を覚えながら色々な検査を受けていた。

白く立方体の装置を相手に、飛ぶようにイメージしたり、教師が持っているカードの表の柄（響からは見えない）を当てて、といったような原作でもよく見られた検査などだった。

それでも能力に関してまだ判明していないのか、響は次々別の検査を受けさせられ、今現在学校のプールにいるが……。

（はぁ……何をしたいのやら……）

先ほど偶然触れた金属がさび付いたことをきっかけに、教師陣が何処かと連絡を取り合って何か騒いでいる。

よくわからないが、能力の種類を学者と一緒にしぼっていると考えるのが妥当だろう。

しばらくしてから、教師陣はこちらへやってくると、そのうちの一人が響に向けて言う。

「君の能力がどの系統かわかった。君の能力は電撃も放てるし、氷や水も扱える。物質の構造や把握、結合、分解のほうが長けているがな。……さて、ここにある特殊なコーティングが施された機器に、高密度のエネルギーを思い浮かんだイメージ通りに叩き込んでくれ。何度試してくれてもかまわない」

目の前に出された機器は、先ほどの四角い測定器より、2、3周り大きかった。

見るからに頑丈そうなそれはプールに沈んでいて、響は静かに目をつぶり、考える。

少しずつ、時折顔を出す『パーソナルリアリティ自分だけの現実』。それを確実に見つけて引きずり出す。

（・・・構造、把握・・・組み換え・・・結合・・・分解？・・・）

自然と頭に浮かんでくる言葉を、イメージと結び付けなるべく正体を模索する。

（・・・ベクトル？いや、違う。電気？違う・・・けど・・・近い？）

ほんの少し、脳の奥にしびれが感じられた。

電流がかすかの走ったような感覚に、手ごたえを感じた気がした。

それを頼りに、響は『パーソナルリアリティ自分だけの現実』をさらに模索する。

（電子・・・ッ！・・・かなり近い！？それを含む・・・そうか）

脳の奥で徐々にもやもやしていた違和感の塊が安定していくような感じがした。

イメージが液体となって脳に浸透しているのかもしれないと錯覚すらしそうだ。

（原子！）

右手を前に突き出し、目をつぶって得た『バーソナルリアリティ自分だけの現実』を脳内で確認する。

（原子の構造や原子の内部の電子や核を操ったり、その原子の性質に携わる現象を巻き起こす、それが俺の能力！）

目を見開き、響は前に突き出している右手の手の平に意識を集中させた。

（・・・核融合レベルのエネルギーなら、あの物質だって跡形もなく吹き飛ばせる）

ふしぎな感じだった。

意識を集中させ、イメージ（演算）するだけで響の体からこっそり体力が抜き取られていく。

脳がいつの間にかかなりの働きをしていることに気がつくが、下手に気にして演算とやらの邪魔をするわけにはいかない。

（・・・エネルギーを制御、・・・）

響の手のひら数ミリ前に、オレンジ色の球体が出来あがった。

徐々に膨れ上がろうとするそのエネルギー体を響は手のひらサイズの大きさでとどめたまま、次の演算を行う。

（エネルギー体の照準を設定、爆発量を最低限に制御、自身への熱エネルギーを遮断・・・ッ・・・）

かなり高度な演算がいくつも折り重なっているからなのか、響は初めての能力使用に手間取っていた。

教師は近寄りたいが、暴走の不安もあり、近づけないで心配そうに響を見ている。

だが、響はそんな教師陣を置いてプールに沈んでいる四角い機器を睨みつける。

（・・・いける！）

そして、彼は右腕に左手を添えるようにして構えた。

「いけ！」

直後、オレンジ色の高密度のエネルギー体が光線となって響の手から放たれた。

オレンジ色の光線は正確に水の中の四角い機器に直撃し、機器を容赦なく貫く。

同時に、突然高密度のエネルギーを受けた水が水蒸気爆発のようなものを起こし、残った水も真上に吹き飛んだ。

噴水というよりも間欠泉と例えたほうがいいかもしれない光景だった。

数秒送れて雨のように降ってくる残りの水も、熱湯と化している。

「熱っ！？・・・やりすぎたかな？」

当然、プールの中ははクレーターが出来ていてボロボロ、プールサイドもごつごつとした瓦礫の山と化しており、けが人が出なかったのが奇跡だったかもしれない。

沈黙が周囲を覆って居た中、響の真横に置かれていた白く立方体の測定機器は無機質な音で響の能力を測定する。

《記録 エネルギー射出速度、秒速1100m。演算時間、10秒。構造把握時間0.8秒 総合評価：レベル5》

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

思わず、響だけでなく周囲にいた教師陣までもが驚愕のあまり声が出なくなった。

確かにこれだとレベルが高くなると思っていたが、学園都市にも数人しか居ない中に入れるとは夢にも思わなかったからだ。

原作を読みながらレベル5って大変だろうななどと言っていたが、まさか自分がそうなるとは思ってもいなかった。

教師の一部は感動しているようだが、響には達成感よりもやってしまったという罪悪感が強かったらしい。

一人廃墟と化したプールを見て、青ざめながら呟く。

「これ……弁償……しなきゃ……駄目？」

「馬鹿ね……しなくてもいいに決まってるじゃない。一々そんなことを相談するなんて、馬鹿の極みね」

「反論できません……」

「それにしても原子操作……マルチオペレーションね。流石の私でも隠蔽は出来ないわよ？」

「え？なんでさ」

「私の能力自体は珍しくないの。ただレベルが高かっただけ。でもお前のその能力は規模が大きい上、珍しいのよ。第二位は別として、超能力者レベル5を物理と化学に二分した場合、お前のそれは明らかに化学の最高峰の能力でもあるのよ？」

何処か楽しそうに笑みを浮かべている藍の前に、響は疲れた様子で机にうつ伏せになる。

ここは教室で、すでに授業は終わり、HRも終えたところで、皆荷物を整理するなど帰る準備を進めていた。

すでに荷物を整理し終わっていた響は藍が教科書を鞆に入れ終えたのを確認すると、立ち上がり、鞆を持つと藍と並ぶ形で教室を出た。

藍の横を歩くだけでも周囲からザワザワ騒がれるが、もはや響は気にしていない。

すでにこの学校唯一の超能力者<sup>レベル5</sup>として騒がれていることもあるかもしれない。

結局、このような騒がしさに慣れてしまっしかないのだ。

「・・・はあ・・・。お前、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>じゃなかったっけ？」

「そうね。お前の思うとおり、私は今日は非番であってよ」

「おいおい、それでも今ってあの事件の真っ最中だろ！？調べなくていいのかよ？」

「結果は変わらないわ。ってそうね。一応支部には行くわよ？非番といっても緊急事態だからね」

下駄箱で響と藍は靴を履き替え、校庭に出る。

今日は昨日ほどは暑くないため、二人とも日差しが少しまぶしいと感じただけでこれといった仕草はしなかった。



周りの視線を気にしない様子で二人は足を進める。

そんな二人に、見たことのある少女が駆け寄ってきた。

頭に花飾りを乗せた腹黒少女、初春飾利である。

「昨日ぶりです！響さんに橘先輩！これからどちらに？」

「貴方だつてこれから調査でしょ？これから支部に行くところよ」

「じゃあ響さんは？」

「ああ、俺もコイツの調査に手伝えることがないかなあ、って感じだ」

「ええッ！？いいんですか！？今噂の超能力者<sup>レベル5</sup>が手伝ってくれるなんて感激です！それにしてもお二人とも随分噂になってますね。なんとも、橘嬢には恋人が居た、とか何とか・・・」

初春の何気ない質問に、肩を落としたのは響ではなく藍だった。

響は響で呆れたようにため息をついている。

「愚かな考えね。一体どう考えればそうなるのか、脳みそをばらして調べてみたくなるわ……。こんな変人、初春にくれてやるわ」

「・・・地味に傷ついた・・・」

「仕方ないですよ響さん。その切れ味が橘先輩の持ち味ですからね。大丈夫ですよ！響さんも内面はあんまり知りませんが、見た目は

いいですから！」

「……褒められてるのか？これ」

初春の追撃でさらに精神的疲労が重なる響。

初春にも悪気はないのか、キョトンとした顔で頂垂れる響を見ている。

（ん？）

相変わらずの幼さが目立つかわいらしい顔の横から響は、初春に近づいてくる少女を見つけた。

黒くて長い髪、頭に花の髪留めとくれば響にはそれがもう誰だかわかった。

心の中でその名前を呟こうとしたときには、すでにその少女は初春の真後ろに居て……。

あれ、このパターンってどこかで……。

「うーいはーるーん」

バサアッ！という音とともに初春のスカートが大きくめくれあがった。

とっさのことで響も初春も反応できず、響は硬直、初春は驚いてい

る。

フワリ、とスカートがめくれ、響の視界に白い物体が

「何中一のパンツ見ようとしてるのよ。ケダモノ」

映りかけた瞬間にドゴオッ！と響の後頭部に藍の裏拳が叩き込まれた。

「痛~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ツ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ツ！！」

「ひゃあッ！？佐天さん！！やめてくださいって・・・って！大丈夫ですか！？響さん！！？」

「あ、あれ？う、初春！？こうなる予定じゃなかったんだけど！？」

「・・・カオスね」

黒く長い髪の少女、佐天涙子もこうなることを予想できなかったのかオロオロしていた。

涙目ながらも顔を上げた響は、何とか痛みに耐えながらも口を開く。

「えっと・・・転校生の天王寺響・・・です。天王寺って言いづらいから響でいい」

「え！？あつ！私は初春の親友の佐天涙子です！ってことは響さんが噂の超能力者<sup>レベル5</sup>！？ハッ！？それに橘先輩！？何故ここに！？もしかしてあの噂は本当だったんですかー！？」

「貴方も相変わらずで何よりだわ……」

心の底から呆れたようにため息をつく藍。

そんな藍を見て、初春が誤解を解くために佐天に説明をしてくれた。

このあたり、気遣いが結構あるやつなんだな、と響は再確認する。

と、それもいいが、周囲の視線がさきほどよりもこちらに釘付けになっていた。

佐天のせいでもあるだろうが、元々目立っていたのは自分たちなので響は驚かない。

だが、佐天や初春は目立つことになって（割り切れて）いないだろう。

恥をかかすのも気が引けたので状況を伝えてみるべく響は口を開く。

「……それより、さっきから俺たち、目立ってるんじゃないか？」

「……………」

「そうね。ここでしゃべるのもなんだし、とりあえず支部へ行きましょう」



## 第二話：Get ability level ? （後書き）

↓ 主人公の能力説明 ↓

・ マルチオペレーション  
原子操作

名の通り、原子を操る能力。

原子を操る、といっても原子の把握に長けているため触れた物質の分解したり、結合したりするのが得意。

物質内の原子の構造（組み合わせ）をいじくり、氷や水を生み出したりすることも出来るが膨大な演算が必要なためにあまり多用は出来ない。

原子を操る、とあるが、内部にある原子核や電子をいじくることも出来るため高密度なエネルギー体や電撃を生成、射出することも可能だがかなり体力が削られる。

操る対象である『原子』という概念が広く適用されている曖昧な能力。

### 第三話：saunter

「初春、御坂美琴がもうじき来るらしいわよ？」

「そうなんですか？じゃあお茶でも入れとかないといけませんね」

「初春・・・お姉さまを迎えるのはいいのですけど、今の事件の状況をわかってて言ってますの？　　そう言えば、響さんはお姉さまと会うのは初めてでしたわね？」

「ああ、そうだ。御坂美琴って『あの・・・学園都市第三位の超電<sup>レ</sup>磁砲<sup>ルガン</sup>御坂美琴か？」

「他に誰がいるというのよ・・・」

原作知識がありながらも初対面を装うべくとぼけていた天王寺響は、ただいま風紀委員第一七七支部で橘藍、初春飾利、白井黒子、佐天涙子とともに連続虚空爆破事件について調べていた。

響の能力のレベルについては初春や佐天のせいすでに白井に知られてしまっている。

調べているといっても初春がパソコンでなにやら調べごとをしている後で、三人が立っているだけなのだが・・・。

立っているのもだるくなってきたのか、すでに藍は付近から使われていなかった椅子を持ってきて腰をかけていた。

茶色く長いしなやかな髪を右手で払いながら、彼女は面倒臭そうに

目を細めると

「くれぐれも言っておくけれども、御坂さんと能力対決・・・すればどうなるかはわかって？」

「どうしたんだよ？俺はそんなことする気ないの知ってるだろ？」

「いえ、その・・・非常に言いづらいのですが・・・」

「ですよね・・・その御坂さんは何というか・・・」

「そついうのが大好きというか・・・その・・・」

藍の言葉の意味を知ってか、響に白井、初春、佐天は気まずそうに続けて説明していく。

だが、言いづらいために最後あたりはつきりと言わない三人を見かねて、再び藍が口を開く。

「要するに狂戦士<sup>バーサーカー</sup>ってやつよ。戦闘狂でもいいかしら？そんな彼女とお前が戦ったらどうなるかなんてもはや言わないでもわかっていて？」

「なんでさ。俺が戦わなかったらいいだけだろ？大体、俺なんかその御坂に目をつけられることはないって・・・」

心の中で響が『それに御坂に目をつけられるのは上条さんだけだろ？』と思っていることも見透かしたような目で、藍は不機嫌そうに目を細める。



「・・・一々その無自覚な口癖、腹が立つわね」

「口癖？」

「こちらの話よ」

尋ねてきた佐天の質問に、適当に答えつつ藍は、入り口の向こう側からするかすかな足音（走っているためか藍には聞こえた）を聞いて呆れたように再び目を細め、ため息をついた。

その仕草に気付いた初春や白井は顔を上げて、支部の入り口のほうへ目をやった。

それからほんの数秒間、沈黙が続いたかと思うと、何の拍子もなく突然電子ロックのかかっていたはずの入り口の扉が電子音を発しながら開いた。

「黒子ー手伝いにきたよ」

入ってきた人物に、その場に居た中で唯一響だけが驚いた。

常盤台中学の制服に茶髪ショートヘア、そして何よりも目立つのはこの電子ロックされた扉を簡単に解除してくるその能力。

御坂美琴。

原作のヒロインの一人で、この学園都市に七人しかいない（八人目は響だが、これはまだ知れ渡っていない）の第三位。

電撃使いの頂点のその少女はズカズカと支部に入ってくると、響たちのいる場で立ち止まった。

少女は集まりの中に、響の姿を確認すると軽く目を動かした。

自己紹介の切り出し方をほんの反射的に考えだした仕草に気がついた自称露払いは、横から丁寧二人の間に立って説明を始める。

「お姉さま、説明しますの。こちらは昨日話した天王寺響さんですの。そして、響さん、こちらがかの有名な常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫、御坂美琴お姉さまですわ!」

(・・・説明の差がすごくてよ)

白井の紹介を互いに受けた響と御坂はお互い正面から向かいあい、笑みを浮かべると

「へー。アンタがこの街に来て何もわからない状態で湾内さんを助けたヒーローさん?聞いた時には驚いたわ。後輩を助けてくれてありがと、私は御坂美琴。よろしくね」

「結局俺も白井に助けられたんだけど・・・俺は天王寺響。こちらこそよろしくな!」

「そーいや、今日能力開発受けたんだっけ?懐かしいな。不思議な感じじゃなかった?アレ?」

「そうそう、お姉さま。それについてなんですけど響さん、凄いい

ですの。だって  
」

第七学区のとある広場のベンチにて、響と初春はクレープを片手に休憩していた。

クレープにかぶりつきながら、二人は会話する。

「いやゝそれにしても、橘先輩、怖かったですねゝゝゝ。私、アレを久しぶりに見ちゃいましたよ」

「俺たちだけでも逃げられて良かったゝゝゝ。白井はともかく、佐天には悪いことしたな」

「そうですねゝゝ」

二人がここにいる理由はとても簡単で、支部から逃げるようにパトリールを申し出て逃げてきたというところだ。

逃げる理由としては、先ほど白井「響が超能力者であること」を御坂に話してしまい、そのせいかどこかソワソワし始めた御坂に、藍が釘を刺すように説教を始めたことが原因だった。

パソコンで調べていた段階から、外で見回りを行わなければならないことは決まっていたので別に問題はないのだが、うまくその話に乗れなかった佐天は支部に置き去りにされている状態だ。

（どうしようか？私、男の人と二人で食事するの初めてだからゝえっと！？何を話せばいいんでしょうか！？）

「なあ、さつきから顔赤いけど、どうしたんだ？体調悪いのか？」

「えッ！いや、違います違いますよ！私はこの通り！この花のように元気ですっ！！」

基本的に佐天や白井といった同年代か同性とずっと一緒に居る初春は、響みたいな人間相手でも少しなれるのに時間がかかるらしい。

だが、響は逆に誰にでも接するのになれている（橘藍の影響は大）ので誰かと二人きり、という状況を意識したことがない。

頭の上に？マークを浮かべる響を前にガッツポーズする初春。

一連の初春の反応や動きに、小動物のような感じを覚える響。

「そうか、初春が風邪になると連動してその頭の花が枯れ落ちるんだっとな・・・ほ！」

掛け声とともに初春の頭の花飾りに手を伸ばす響。

初春は頭に手をのせ、頭を守りながら

「連動しませんし枯れませんよ！？ってクレープ食べるの早いです！まだ私半分も食べてないじゃないですか！？」

「調査しているはずがクレープ食べてるなんてばれたらまずいからな。味わいながらも急いだんだ」

「なら、すぐに食べます！待っててください！」

「いや！？俺はそんなつもりでいったんじゃ！？」

「……………」  
ふぐっ！？ふがふがっ！？」

半分以上残っているクレープを口にほうり込んだためか、のどにクレープがつまり苦しそうに胸を叩く初春。

涙目で苦しそうにもがいている初春の背中を苦笑いのまま響はさすってやる。

「おい！？クレープで喉つめるなんて初めて見るぞ！？」

ようやく飲み込めたことに安心した響はほっとした様子で息をもらす。

一方、クレープとの格闘を終えた初春は、未だ潤っている目で響を見上げると

「ありがとうございます……ううっ……」

恥ずかしいのか、拗ねたようにそっぽをむく初春。

なれない状況でもあるせいか、やけに滅茶苦茶な自分の行動にうろたえているだけもあるのだが響がそれに気付くことはない。

響と自分の座っている間に置いていた缶ジュースの蓋を開けると、初春はそれに口をつけて一息つき、響に話しかける。

「……響さんって凄いですよね……」

「は？なんでさ」

「いや、だって、響さんはこの街に来て右も左もわからないのに湾内さんを助けたじゃないですか？」

何処かうらやましそうに呟く初春を前に、響は苦笑といった様子で

「・・・いや、違う白井が助けたんだ。俺は何も出来てないさ」

「いえ・・・響さんがいなかったら湾内さん、危なかったですよ。私ジャッジメントなんか風紀委員なのに、白井さんのサポートに回るくらいしか出来なくて・・・」

「・・・くらいしか、じゃないだろ？」

「いえ、私は皆さんみたいに現場では活躍できませんし・・・」

言葉の後、初春は下を向いて黙ってしまった。

原作知識のある響は初春がこのことについて気にしている理由を、知っている。

彼女は風紀委員ジャッジメントの中でも

その年齢に見合わぬコンピューター等に関する技術に恵まれているが、現場で動こうにも体力があるほうではない。

そうなれば裏方から現場の者を支えることが、彼女の才能をもっとも発揮できる場となる。

しかし彼女も中学一年生で風紀委員ジャッジメントとに務めるほど人を助けたいという気持ちは大きい。

事件がおきている現場に直行し、すぐに事件を解決したいという衝動が何度湧き上がったのだろうか？

自分はサポートにしか回れないと自覚している初春は、現場で人を助けることに對して特別な感情を持っているのかもしれない。

そんなことを考えながら響はベンチの真横にある自動販売機でジュースを買う。

缶にはヤシの実サイダーと表記されているが、今それは関係ないだろう。

「初春……俺は凄いと思うぞ？」

「え？」

「そのサポートに白井は守られてるんだよ。　そうだろ？あれだけ動き回ってる白井が大怪我しないのも、より早く困っている人のもとに助けに行けるのも、被害が最小限に収まることも、全部お前の成果じゃないのか？」

「……」

響は別にお世辞でも、慰めるために言っているつもりはなかった。

ただの本心。

真実、思ったことを口にしただけに過ぎない。

「お前のソレは、現場にも、それよりもっと広い範囲に働いてるんだ。だから俺は、十分胸張っていいことだと思う」

「響さん・・・」

そこで、柔らかな笑みを初春は見せた。

その笑みを見て、響はいじわるそうに笑いながら初春の顔を見て言う。

「それはそうと、さっきから頬に生クリームついたままなんだけどさ？」

「ふえッ！？えっ！？」

ボンッ！という音がしそうなくらいの勢いで初春の顔が真っ赤になった。

顔から湯気が上がっていても違和感がない光景なのだが、初春は混乱しているのかあわわわ・・・、などととりあえず慌てているような素振りを見せる。

響から顔を背けると、頬についた生クリームをふき取り、恥ずかしそうにこちらに向き直る。



「とっ、とれましたか？」

「いや、まだ頭の上に花がついてる。取ったほうがいいじゃないか？」

「そうですね．．．ってこれは違います!？」

再び頭に乗せてある花飾りを守るように手で覆いながら、初春はつつ込みを入れた。

その反応に冗談冗談と笑ってみせた響は、ベンチに腰をかけたままの初春を前に缶ジュースを飲み干し言う。

「さー休憩はこれくらいしときますか」

「．．．っー．．．づかれたあ．．．」

明るい真夏の日差しの中、御坂は第七学区をアテもなくフラフラと徘徊していた。

あれからというもの、藍の説教でこつてり絞られた御坂は調査をすと言った白井と疲れたから支部に残ると言った佐天の二人を置いて、気分転換にも街を出歩いていた。

御坂から見て、橘藍という人物は先輩にあたり、頼りになる上優しくいつでも冷静な節がある人物だ。

だが、正直怒ると怖い。

反論が全く出来なくなると言ってもいい。

「でも、能力を使うくらい、いいじゃない・・・」

弱々しく呟いたのは、万が一でも藍に聞かれたらまずいからだろう。

（そう言えば、橘先輩の能力を私はほとんど見たことないわね・・・）

正確には数回あるのだが、御坂は彼女の能力をほとんど見たことはなかった。

事件が起きた時の現場では、基本的に橘藍は女の子らしい体つきにも関わらず体術などで済ませてきた。

いつでも落ち着いた様子で、荒々しく感じさせない動きだったのを御坂は覚えていた。

彼女が二年前に転生してきた、転生者という事実は藍本人と響以外知らないし、まず理解自体できない。

事件の時でも藍は『目の前を見ていないんだ』と御坂は感じた。

まるで、つい最近まではほとんどのことに興味を持っていなかったようにも見えた。

だが、今は前よりも生き生きとした目になっている・・・気がする。

そんな先輩に先ほどまでこつてり絞られた御坂なのだが……。

（……こつそりなら、バレないわよね？）

やはり性格は簡単には変えられない。

御坂は街を徘徊しながらも、響を探すことにする。

（まあ、向こうの能力の練習を兼ねてってことでいいわよね？）

能力開発を受けたばかりの響を能力に慣れさせることにもなるだろう、と御坂は考える。

別に『あの馬鹿』のように強引に追い掛け回す気はないのだが、一度くらいなら向こうも男子だし勝負事には乗ってくるだろうと御坂は考えていた。

（よし！なんかやる気出てきたわ！）

再び活力を取り戻した御坂は、いつも通りの歩き方に戻り

「よっしゃー！かかって来んかいおんどりやあー」

変なテンションのまま響の探索を始めた。

（……何か……嫌な予感がする）

「どうしたんですかー？響さーん？」

「いや、なんでもない」

一瞬だけ顔を青ざめていた響に、気になった初春は声をかけた。

だが、響はハッ、と我にかえると大丈夫大丈夫、といったように手で表現しながら足を進めた。

初春と響の二人は今、原作であるセブンスミストの周辺を歩いていた。

このあたりは学生が住んでいる寮よりも、高層ビルが多く住宅街というよりはまさしく都心部という表現が似合っている場所だった。

あらゆる学区に接している第七学区だからこそ、少し歩くだけで街並みが変わるくらいの側面を持っている。

そのことに感動しながらも響は周囲を見回しつつ歩く。

「今起きてる事件って、結構ニュースになってる連続虚空爆破事件グラビトン？ええつとアルミを・・・何だっけ？」

「はい。能力でアルミを基点に重力子を加速、それから周囲に放出させてアルミを爆弾のようにしている・・・とのことなんですけど・・・」

「けど？」

「該当者がいないんです。あの威力を出せる人物は<sup>レベル4</sup>大能力者の一人

だけしかないんですけど、彼女には確実なアリバイがありますし・  
・」

「なるほどな」

原作知識を持つ響は犯人を知っている。

その簡単に見つからない理由も、動機も。

しかし彼には今、その犯人を捕まえる術がなかった。

一つ目はストレートな理由だが、まず証拠がない。

二つ目は、被害の状況悪化の心配。

彼の性格からするに、二つ目は彼自身の関わり方では理由にすらならないわけなのだが、どこか心の隅で転生したことを実感していない部分があるようだ。

（だけど、今の俺にはここが現実で向こうが架空の世界……。いい加減慣れないとな）

「あれ？あそこに人集まってなすけど、何でしょう？」

しばらく歩いていた二人だが、初春は道の隅に何か見つけたのか、指をさしながら呟くように響に尋ねた。

響も釣られたようにそちらを見たのだが、すぐに苦笑いになった。

流石に今度は個性的とは思えないほど、柄の悪そうな集団が臆病そ

うな少年を囲んでいてそのうちの一人が少年の胸倉を掴んでいるからだ。

正真正銘、どこから見てもカツアゲだ。

「初春、見るからにカツアゲ。って多くないか！？俺の前居た所でも流石にこんなにあからさまのなかつたぞ！？」

「そうですね。そこまで多いとは思いませんけど、やっぱり外よりはハジける学生が多いんでしょうか？響さんにとっては昨日の今日じゃないですか？」

「なあ俺のエンカウト率が高いのかな？」

「そんなことよりも、助けないと不味いですよ」

「・・・」

しかし返答はない。

「響さん？」

ジャケット  
風紀委員の腕章を付けながら初春が振り返ると、すでに自分の横には響の姿はなく・・・

「おい、離してやれよ」

(ええええええええええええええええええええええーッ！  
？響さん！？いつの間に！？)

昨日と同じように、不良の集まりの中にズカズカと入っていく響の姿があつた。

視点変更：響視点

俺こと、天王寺響は不良の集団に睨まれていた。

人数は昨日よりは少なく、七人程度。

だがどうも昨日（転生当日）見たようなゴリラとは違い、正真正銘のチンピラぐらいだ。

一人一人、そこまで体格はよくない。

当然、今までこつちの世界に住んでいたわけではないから能力があつても実感はなく、不安なのは変わらない。

そんな俺の前に、絡まっている少年の胸倉を掴んでいた髪型がオールバックの不良が手を離してこちらに少し歩み寄ると

「カツコおい。ヒーローみたい。だけど・・・なあ？俺たち、コイツが金かしてくるっていうから借りてただけだって」

ハハッそうそう、などという言葉が周囲から飛んでくる中、オールバックは下品に俺の前で笑って見せた。

こういう雰囲気はたまにだが転生前も見られた感じの悪い雰囲気だ。  
あまり好きにはなれない。

そして、オールバックは右手をかざしてその上に大きな火の球体をつくり上げると得意げな顔になり

「俺は強能力者<sup>レベル3</sup>だぜ？尻尾巻いて逃げるなら今のうちだ」

俺に向かって警告するかのように徐々に掌の炎を拡大させていく。

音を立てて広がっていく炎に俺は息をのむ。

（能力ッ・・・）

俺は正直、能力を適切に使える自身が全くない。

剛速球が投げられることと野球の試合で投げるのは全くの別問題だ。

（そう言えば、原作では黄泉川愛穂はレベル3ぐらいまでなら素手で倒せるんだっただな）

だけどそれは、能力者と戦うことに慣れているし訓練で鍛えられた人間だからこそ出来ることで、喧嘩慣れすらしていない俺には出来ない芸当だ。



「・・・クソツたれ！逃げるわけないだろ」

「へえ、逃げないか。なら！真っ黒焦げになりやがれ！！」

「ッ！？」

俺の目の前にいたオールバックの掌から炎が溢れ出すように広がっていく。

赤い赤い未だ現実感を俺に与えないソレは、オールバックが右腕を振るう動作とともに、俺に一直線に飛んでくる。

炎は速く、俺を焦らせる。

赤いソレは身の危険を感じさせるには十分な威力だった。

脅威を感じた俺は、気がつけばすでに脳内で演算を行っていた。

バキィイツ！と

俺の目の前に俺より一回り小さな氷の塊が突如出現する。

それはあまりにも純度の高い氷で　炎をものともせずを受けきってしまった。

氷にあたり、火の粉となって飛散する炎を見ながら俺は冷静さを取り戻す。

「強能力者<sup>レベル3</sup>・・・って言ったな。やってくれるじゃねえか」

「なんだッ！？今のアレを防いだ！？氷で！？お前は一体！？」

「一般人だよ。空気中に含まれる窒素の『構成を組み替えて』固体の状態へ変化させたんだ」

そう言いつつ俺はオールバックが慌てて撃った二発目を今度は地面から水を吹き上げさせて作った柱を発生させて防ぐ。

「ッ！？水だとッ！？　　がッ！！？」

驚いていたオールバックの顔面を俺は思いっきり殴りつけた。

喧嘩にも慣れていない素人の拳だ。上条さんのように気絶させるまでには到底及ばない。

慣れない骨と肉の感触に、不快感を感じた。

オールバックも驚いていた隙を突かれたために反応が出来ずそのままヨロヨロと不安定な体勢のまま後に下がる。

「くそっ！！いい加減にしやがれ・・・」

焦るオールバックを前に不良たちはいつせいに能力を使用するような体勢になるが、俺は確かな手ごたえを感じつつ演算の時の感覚を覚えるように思い出す。

オールバックは仲間を見て、多対一の状況に余裕を持ったのか口をひらく。

「ははは！調子に乗るからだ！ヒーロー気取りのガキめ！いくらお前が氷を操る能力者でも！　　これなら！！」

「！」

オールバックが叫んだ瞬間、オールバックを含む全員が何かしらの能力を使用し電気やら水やら火を飛ばしてくる。

「ははは！！後悔しな！！」

「一つ間違ってるな。俺はそんな能力じゃない」

声を発すると同時に、俺はアスファルトの地面を思いっきり蹴り付けた。

靴底と地面がこすれる乾いた音がすると同時に、アスファルトの装甲が粘土のように、生き物のように、地面から生えるように盛り上がり、俺を守る形で壁を形成した。

分厚いアスファルトの壁は周囲からの攻撃と相殺し、ボロボロと音を立てて砕け散った。

俺自身も初めて目にする奇妙な光景に、不良たちは口をあんどぐり開けている。

だが、不良たちも馬鹿ではない。

オールバックが再び合図を送ると、周囲の不良たちが再び能力を使用するべく構える。

「へっ・・・どんな能力なのかは全くわからねえが、数ではこっちが上！防戦一方の奴に恐れることなんざねえ！波状攻撃で攻撃し続けてやるうじゃねえか！！」

（・・・これはどう攻撃に使えば・・・チツわからねえ！）

俺の能力はレベルが高いとはいえ、手加減と使用方法が難しい能力だ。

高密度エネルギーなんて暗部じゃあるまいし、ガンガン撃つ気はないし、氷や水を操るには『組み換え』作業という脳への負荷が大きい作業をしなければならないので防戦一方は厳しい。

俺も一応電撃が出せるが、（人に放つことに慣れている）御坂ほど細かく制御出来る自信がない。

（うつわー。これなら電撃使いのほうがマシじゃねえか！！）  
エレクトロマスター

俺がどう対応しようか迷った瞬間、不良の集団の外側から声が聞こえた。

「ちよろっと、アンタたち」

「「！」「」

確か、この声は先ほど初めて生で聞いた声で、生でないなら結構聞き覚えのある、間違えはしない声。

そう、俺の記憶にまだ新しい、電撃姫の声。

「私の友達に、手、出してんじゃないわよっ！！」

刹那、俺の周囲、正面にいた不良が能力ごとの確に雷撃の槍で撃ち抜かれた。

その際に広がった余波は強く、ビリビリと俺の肌を叩く。

俺は思わず衝撃に目をつぶりそうになったが、物が倒れるような音とともに力なく真っ黒焦げになった不良たち全員が崩れ落ちる。

安心したのか、自然と息をもらした俺は背後から誰かが歩いてくるのがわかった。

ゆっくりとした足取りに俺は振り返りながら、笑う。

「全く、アンタも随分とお人好しよね」

俺の振り返った先、そこには 御坂美琴が呆れた様子の顔で立つ

ていた。

視点変更：通常視点

「御坂・・・か。ありがとうな。助かった」

「礼はいいわ。全く、アンタも何考えてんだか・・・」

「そうですよー響さん。横見たらいなくなってるんですから、私、びっくりしちゃいましたよ」

呆れたようにため息をつく御坂と初春を前に、響は申し訳なさそうに頭に手をやって目を二人から逸らしていた。

場所も移動し、ここは原作における上条当麻と神裂火織が交戦することになる交差点。

時刻的にも夕方なのだが、夏のためまだあたりは明るく、たくさんの人が道を行き来しており、巨大なデパートやショッピングモールを四方で結んでいる歩道橋も人であふれている。

今からセールの店もあるのか、その賑わいが消える様子はまだ見られない。

「うーむ、それにしてもこの街は新鮮な感じでいいよな」

「確かにね。私が来たのは小さい頃だったけど、同じように思ったことは今でもはつきり覚えてるわよ？」

「御坂さんですか！？実は私も結構鮮明に覚えているんですよ！」

「へえ。それって急に『SF小説であるような御伽噺のような世界に來た！まるで御様みたい！』って感動だったりするの？」

「そうそう！そんな感じですよ！あ！今、響さんも同じように感動していたんでしょう！？そうでしょう！？そうですよね！？」

やけにテンションが高く、目を輝かせながら近づいてくる初春に一瞬間疑問を感じた響だが、ここで原作知識が大活躍。

初春のテンションが高い理由を即座に先ほど自分が発した言葉と特定するのに、一秒もかからなかった。

（お姫様？・・・まあ、お嬢様と近いからか）

手で初春を制しながら響は答える。

「ま、まあそんなところだ。男の子としちゃあ、冒険気分ってところか？（転生してきた俺にとっちゃあ少しオカルトティストな感動もあつたけど・・・）」

「わかるわかる、男の子ってそういうの好きそうだもんねー」

うんうん、と頷く御坂に初春もそうですよねーと同意する。

御坂を見ていた響は御坂を見て何か思ったのか、一瞬思いついたような感じになると御坂に向かって尋ねる。

「なあ、御坂。さっきどうして御坂はあの場所にいたんだ？藍や白井や佐天も一緒じゃないみたいだし・・・」

「っ！！そうよアンタ！！」

「ッ！？はいッ！？」

突然叫びだした御坂にビクウッ！と驚きながら、響は御坂がうろついていた理由に気づく。

初春は頭の上に？マークを浮かべてしまっていて、周囲の人何事かと二人に注目していた。

響が何か言葉を発する前に、御坂は好戦的な笑みで響を指差し言い放つ。

「私と勝負しなさい！！」

「だが断る！」

「即答！？いや、勝負しなさいよ！！」

「なんでさ。もしそれが藍にばれたらどうするんだよ？」

「うッ！・・・で、でもバレなければ・・・」

オロオロしながらでも勝負を申し込んでくる御坂を前に、響はただ呆れることしか出来なかった。



この世界には二年前から橘藍という存在が世界に介入してきた。

別段、目立ったことはしていない（らしい）が御坂が響に対し、上条のように扱えないのは藍の怖さがあるからだろう。

・・・アイツ、怒ったら怖いからな・・・。

「はあ、仕方ない・・・。」

「!？」

困った奴だ、とでも言い出しそうな気だるい感じのまま響は返答する。

「勝負、受けてやる」

### 第三話：saunter（後書き）

能力のレベル大きいのに弱っちい主人公ですねw

まあ、今は慣れていないことを目立たせたかったわけです。

あと一、二話すれば原作のほうへ入っていきたいと思っています。  
しばしお待ちを・・・

さあ週はいよいよ、御坂VS響の一騎打ちです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2863z/>

---

とある転生の原子操作（メルトオペレーション）

2011年12月20日17時50分発行